夢跡一紙

「根に帰り古巣を急ぐ花鳥の、同じ道にや春も行くらん」。げにや、花に愛で、鳥をうらやむ情、それは心ある詠めにやあらん。これは親子恩愛の別を慕ふ思ひ、やる方もなきあまりに、心なき花鳥をうらやみ、色音に惑ふあはれさも、思へば同じ道なるべし。

さても去八月一日の日、息男善春、勢州安濃の津にて身まかりぬ。老少不定の習い、今さら驚くには似たれども、あまりに思ひの外なる心地して、老心身を屈し、愁涙袖を腐す。さるにても善春、子ながらも類なき達人として、昔亡父此道の家名を受けしより、至翁又私なく当道を相続して、いま七秩に至れり。善春又祖父にも越えたる堪能と見えしほどに、「ともに云べくして云はざるは人を失う」と云本文にまかせて、道の秘伝・奥義ことごとく記し伝へつる数数、一炊の夢と成て、無主無益の塵煙となさんのみ也。今は残しても誰がための益かあらむ。「君ならで誰にか見せん梅の花」と詠ぜし心、まことなる哉。しかれども、道の破滅の時節当来し、由なき老命残て、目前の境涯にかかる折節を見る事、悲しむに堪えず。あはれなる哉。「孔子は鯉魚に別て思火を胸に焚き、白居易は子を先立てて枕間に残る薬を恨む」と云り。善春幻に来て、仮の親子の離別の思ひに、枝葉の乱墨を付る事、まことに思のあまりなるべし。

思ひきや身は埋れ木の残る世に盛りの花の跡を見んとは

永享二二年九月日　　　　　　　　　　　　　至翁書

幾程と思はざりせば老の身の涙の果てをいかで知らまし